

---

# アデライード

市川イチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アーティスト

### 【ZINE】

Z9232Z

### 【作者名】

市川イチ

### 【あらすじ】

聖エルンスト高等中学の正門前に着いたとき、父はエンゲルの手をついに離した。短い旅の終点がきたのだった。離れてしまった手の間を、冬の風が冷たくふきぬけていった。いま、世界はあらゆる色を喪って、この親子の上に落ちかかってくるようだった。

(本文より)

## 【〇】

聖エルンスト高等中学の正門前に着いたとき、父はエンゲルの手をついに離した。

短い旅の終点がきたのだった。離れてしまつた手の間を、冬の風が冷たくふきぬけていった。いま、世界はあらゆる色を喪つて、この親子の上に落ちかかつてくるようだつた。

このとき、その一瞬の冷たさが彼にちょっとした悲しみや切なさをもたらしたが、それでも彼はかたくなに唇を引き結んでいた。何か言うことはしなかつた。心にはとうにあきらめと絶望とが渦巻いていて、真冬の木枯らしのように吹き荒れていた。

いまや何を願つてもどうにもならないのだとこゝとを少年は知つていたし、断頭台のうえに引き立てられた囚人が、もはや泣こうがわめこうが首を切り離される運命にあるのだということに疑いがないように、自分の運命がこの田畠の正門のまえに投げ出されいることをも知つていた。それは、今たしかに田に見ることができた。取りだされたばかりのいけにえの心臓のように赤く、ほふられた子羊のようにぐつたりとした、ちっぽけで、それでもある種のどうとさを持った、自分の運命といつやつの姿だった。

「こゝなの」

「そうだ」「低い声が答えた。「こゝがそうだ」

父はすつとうわのそらで、うちを出でから一度もエンゲルの顔を見ようとしなかつた。今もそつだつた。父の声はよそよそしく、ぎこちなかつた。そむけたままの横顔にはびこつてこる無精ひげと、

耳の後ろにある一つのほぐりが、いま、エンゲルに見える父の姿だった。

「中に入つたら、校長先生の部屋に行つて、その……話をすることだ。これからのことや、説明なんかを。わかるな？」

エンゲルは小さな声で「うん」と答えた。

本当はよく分からなかつた。なにもわからなかつた。それでも分からなければならぬといふことを分かつてはいたので、彼はそうしたのだった。運命の無慈悲な手に襟首をつかまれた者は、ただうなだれておとなしく言つことをきくほかに、できることなど何もない。まつとうな人間に与えられうるすべての幸福な未来から自分たちは切り離されて、それだから今、ここにいるのだ。少年はそのことだけを知つていた。

父はそれから、重たくて擦り切れたコートのポケットを「こそ」そとさぐり、何かをとりだして、エンゲルの手に握らせた。それはいくらかの小銭だった。父は穴のあいた手袋をしていた。

エンゲルが手の中のじやらじやらを見つめていると、父の手がのびてきて、かれのぼんやりした指を無理やり閉じさせた。そしてエンゲルの着ている新しい制服のポケットに突っ込んだ。エンゲルはずつと何も言わなかつた。

父は溜息をついた。そしてエンゲルの正面にまわり、息子の両肩に手をのせた。こうして向き合つと、かれはとても久しぶりに父の顔を見た気がした。ぼさぼさで、無精ひげだらけで、疲れ切つて、まるでうすぎたない浮浪者みたいだ。この人は、いつからこんなふうになつちまつたんだろうか。思い出せない。でも、こんなにくたびれて、よごれきつて、ちっぽけだ。顔立ちは似ているはずだが、もうよくわからない。ただ深緑の目の色ばかりが自分と同じだ。

父はゆっくり、しわがれた声で吐き出すように言った。「お前は最初、おれの希望だつた」

エンゲルは、じつと聞いていた。

「十四年前だな、そうだな？　あのろくでもない女が逃げた。置き土産を残してな。おれは怒ったが、同時におれは考えたんだ、赤ん坊のお前を前にして、ひょっとしてお前の面倒を見ることで、真人間になれるかもしれんと思つた。少しごらいはやり直せるかもしかんと思つたんだ。だが駄目だつた。どうだ、おれは何一つ変わらん。お前はおれをまつとうな人間にしてはくれなかつた。だがおれはお前を責めたりしない。だつてお前は悪くないからな。だからお別れするだけだ。さようなら、おれのエンゲル。おれがお前をそんなふうに呼ぶのはこれが最後だ、いいな？」

「はい、お父さん」

エンゲルの返事をききどだけで、父は両手を離した。肩はふつと軽くなり、同時に、少年はなにかとも大切なものが失われたことを知つた。

「お前がおれをそう呼ぶのも、最後だ」

父はもう振り返らなかつた。擦り切れたコートの裾を揺らして、木枯らしの中を、うつむき加減に去つていつた。うちへ帰つて行つたのではなく、あの人はもう自分の知らないどこかへ去つていくのだといふことを、エンゲルは知つていた。あの人は去るのだ。だからもうどこへ行つても会えることはないのだし、あとはお互い、べつべつの生き方をするだけなのだ。これは永遠のお別れにちがいない。父の背中を、踊る枯葉が何枚も追いかけていつた。

こげ茶色のうしろ姿が見えなくなつたころ、門が開く音がした。エンゲルが振り向くと、森にかこまれた古城のような聖エルンストのポーチの奥から、上品なスーツ姿の紳士が歩いてくるところだつた。ああ、この人がそうなのだ、とエンゲルはおもつた。父に棄てられたかわいそうな僕をひきとつてくださる慈悲深い校長先生とやらが、この人なのだ。

彼はエンゲルを見るや、鷹揚に両手を広げて歓迎の意を表した。

「エンゲル・ミコラー？」と尋ねる声は、その姿とおなじよつと上品で、とてもあたたかく、柔らかだった。

「一人かね？」

彼は少し不思議そうに、エンゲルを見た。

「はい」

エンゲルは、ただ一言、そう返事をした。

【一】

新緑に木漏れ陽が散っていた。さながら古畠の古城のよつた聖エルンストの外壁に、それは美しく降りそそいだ。

エンゲルが何気なく「まるで光のシャワーだ」といふと、「もう五月だもの」と、隣を歩いているオリバー・ティー・ツィが気をくな様子でほほえんだ。それから肩をすくめて、こう付け足した。

「素晴らしいね。君が言つと、なんでも詩的に聞こえちまつんだな」「よしてくれよ」

「どうしてかね。僕が同じこと言つたって、君のよつにはならないだろうな。やつぱり見てくれといつものばその人の評価に大きく影響するもんだと思うかい、エンゲル？」

「僕をからかつてゐなら、きかないぞ」

僕はこれでも女みたいな顔だつてことを気にしてゐんだぜ、とエンゲルが片方の眉を上げてみせると、オリバーは面白がるよつに、へえと目を丸くした。愛嬌のある顔がことさらひょうきんになつた。「それじゃ僕と取り替えようぜ、その顔を! そしたら毎週外出許可をもらつてさ、街でガール・ハントとしゃれ込むんだ。きっとなびかない子はいないぜ、よつほど好みが偏つてなけりやね」

エンゲルはあきれ声を出した。「僕の顔がなんだつて?」

「そりやあ、きみは滅多に外出しないものな。いいかいエンゲル、世間つてのはこの監獄みたいな聖エルンストを出たといつにあるんだぜ。世の中には女の子つてものがいてさ、君みたいな顔をした奴のことがたいてい好きで、そのうえ何から何まで不思議だらけの生き物なんだ。まるで砂糖菓子そつくりさ。うつかり食べ過ぎると虫歯にかかつちまつところまでね。でもたまらなくいいもんだよ。知

つている?」

「興味ないね」

オリバーは頭をかかえておおげさに叫んだ。「神よ!」

「きみつてやつは、辞書で引いたみたいな優等生なんだからな。いつたい何が楽しくて、この一度とない青春を生きてるんだ?」

そう言いながらオリバーの白い手が後ろからのびてきて、エンゲルの首にまきついた。彼はこの年頃の少年の多くがそうであるように、親密な相手にはすぐ手をのばして触れたがるたちだつた。自分と同じように骨っぽいからだをした同級生が触れてくるくすぐつたれに、エンゲルは笑つて身をよじつた。「離せよ、ばか!」

「みんな君のこと噂してるんだぜ、東館の堅物つてね。ここに来てもう半年にもなるのに、罰則のひとつもくらつたことがないなんて、奇跡だよ」

「学校つてのは自律の精神を教えてくれる場所だと思つたけどね。そつじやない、先月は二度も罰則をくらつて、今週末の外出許可が取り消しになつたオリバー・ティー・ツツ?」

エンゲルがやり返した。オリバーはとたんに顔をひきつらせて、のどがつつかえたような声を出した。「ひどいや」

「どうだか」

「僕を憐れんでくれよ、エンゲル! だからきみにこいつじて 僕らの頼れる舎監生であるエンゲル・ミコラーに、真正面からお願ひしてゐつてわけじやないか。君ときたら、ワイロのひとつも受け取つてくれやしないんだから」

オリバーが手を緩める。その隙に、エンゲルは体を反転して自由になる。

ちょうど向き合つたちになつて、乱れた髪と首元のタイを直しながら、彼はわざと首をかしげて、何のことかわからないといふふりをした。オリバーは雨の日に棄てられた仔犬だつてもうちよつとましな目をするだらうといつほど情けない顔をして、ぱつ悪そう手を後ろにやつても「もー」と口元を迷わせた。「きみの言つことな

ら、先生も無視しやしないだろ」

「さてね」

エンゲルはあくまでもそりつとほける。オリバーはたまらずに泣きついてきた。

「頼むよエンゲル、先生にかけあつてくれ！ 今週末はどつしても約束があるんだ、ベルタつて可愛い子でさ、つまくいきそつなんだ。この僕が！」

「珍しく？」

エンゲルは皮肉のつもりで口にしたのだが、オリバーは大いにうなずいた。

「そうさ、彼女、僕に好意を持つてるんだ。こんな奇跡、一度はなつて断言できるね。今週末に会えるかどうかが勝負なんだよ」

「愛には障害も必要だつてね。クラウディオ・デュフナーが言つてたよ」

ひょいきんな顔を忙しく回転させて、オリバーは悲鳴じみた声をあげた。

「あんな嘘つき野郎と僕をいつしょにするのか？ あいつはもてるから、言い寄つてくる女の子をかわすためにそんなこと言つたのさ。僕は違うよ、だつて」

しばらく熱弁につきあつてやつた後、聖エルンスト高等学校始まつて以来の優等生は、この悪友のためにつに折れた。「考え方」それを聞くやオリバーは、文字通りとび上がって喜んだ。頼んでもないのに、エンゲルの手から教科書一式と筆記用具をひつたくつて走り出し、「恩に着る！」と叫んだ。「これは僕に持たせてくれ！ ほかに重たいものはないか？ 今日は天気がいいようだけど、暑いなんてことは？ その上着はどうするの？」

彼は、エンゲル・ミコラーから「考え方」の一言を引き出すことに成功したときは、ほとんどの場合においてよい結果がもたらされることが知つてゐるのだった。何かにつけこの調子だから、彼はどこに行つてお調子者と呼ばれる。だが、その言葉には一片の親し

みと愛情とがある。彼を心から嫌いになれるものは、この広い校舎のなかにはいないにちがいなかつた。いつだつて彼のほがらかさと魅力的なブラウンの目は、そのとき相対する誰かの心の中に、いとも簡単に入り込むことができた。彼が口にするちょっととした冗談は、それを聞いた誰もかれもの眉をほんのちょっとぴりだけ下げるのに役立つた。そんなデーニッシュの憎めないところを、結局のところエンゲルもまた嫌いになれず、それだからこうして隣り合つて歩くことがしばしばあるというわけだつた。彼らはよい友人どうしだつた。それでもエンゲルは念を押した。飛び跳ねながら前を行くオリバーの背中に向かつて、

「僕は考えとくつて言つたんだぜ。よく考えた結果、やつぱりこんなやり方は君のためにならないと思って、先生にお願いをすることもあるかもね」

「エンゲル、そんな！」

オリバーがひつくりかえつたような声をあげて立ち止まつた。振り返つた顔が真つ青だ。

一人でしばし顔を見合わせ、やがて少年たちは、どちらからともなく笑いあつた。

\*

オリバーを先に戻らせてしまつと、エンゲルはひとり中央棟にいそいだ。この半年の間にすっかり慣れ親しんだ聖エルンストのなかは、もう田をつぶつても目的の場所にたどり着くことができた。廊下のじゅうたんの踏み心地、壁のてざわり、手すりの磨き込まれた艶までが、いまや彼のものだつた。

途中、幾人もの生徒とすれ違つたが、みなエンゲルに親愛のこもつた挨拶を投げてきた。「やあ、ミュラー！」と氣さくに呼びかけ

てくる者もあれば、意味深な眼を投げてくる者もいた。このあいだノートを貸してやった上級生は、「先日は助かつたよ、今度お礼をさせてくれ!」といつて肩をたたいてきた。彼は落ち着いた笑顔をうかべて、ひとりひとりに手をあげて応じた。そうすることが重要だった。そうして、悠々と廊下を歩きつけた。

やがて一つの扉の前で彼は立止つた。まるでこの部屋の住人を象徴するような、りっぱな獅子のレリーフの扉を一度ノックすると、なから「どなたかね」と低い声がした。「エンゲル・ミコラーです、ヘル・エドワルド」

「お入り」

エドワルド教師は立派な机で書き物をしていた。思えばいつもそうだった。この先生が、たとえばソファでくつろいでいたり、うたた寝をしたり、靴下を脱いで背伸びしたりしているところを、誰も見たことがない。タイをほんの少しゆるめたところすら、誰も見たことがない。

教師の机は窓を背にしているのでひどい逆光だったが、エンゲルはまぶしさを顔に出さなかつた。静かにエンゲルが入室すると、彼は少し顔を上げ、厳格な灰色の目でエンゲルを真正面にとらえた。彼のこの目ににらまれて、震え上がらない生徒はいなかつた。むろん、ただひとり、エンゲル・ミコラーを除いては。

「何か用かね、エンゲル・ミコラー? 先日のレポートなら、いま採点をしているところだよ。返却はもうしばらく待ちたまえ」

エンゲルは扉を後ろ手に閉めて、肩をすくめた。

「そのことじやないんです」

「まあ待ちたまえ。これを済ませてしまつから」

エドワルド教師は入り口のちかくの、来客用のソファを田で指した。エンゲルは言われたとおりにした。それから、何気なく室内を見回した。天井には琥珀色のシャンデリアが吊り下がつている。本棚にはびっしりと蔵書がならんでいる。床のじゅうたんは少しくすんだブドウ色。とても品のいい色だと彼は思つ。エドワルド教

師が向かっている机には、このあいだエンゲルが書いて提出したレポートが載っている。その隣には、白磁のカップがある。

「よければ、お茶をお淹れしましょうか。カップが空では？」

「できるかね？　これは」

「サモワールの使い方は知っています」

「ならお願ひしよう」

エンゲルは立ち上がり、てきぱきと準備を始めた。サモワールに火を入れる。ひとそろいの道具を並べ、戸棚からジャムのびんを取り出し、スプーンの準備をする。しばらくすると部屋に紅茶の香りがただよいはじめた。すばらしい香りの茶葉だった。うんと高価にちがいない。こういったものに妥協をゆるさないのは、いかにもこの厳格な教師らしいとエンゲルは思った。ふと顔をあげると、エドワルド教師はいつしか採点の手をとめて、じつとエンゲルの手元を見ていた。「どこで？」

「父が使っていました」

エンゲルは笑顔で返事をした。「僕の父は、若いころにたくさん旅をしたので、いろいろな国のお茶の作法を知っています。これは一年ほどロシアにいたときに習つたのだと書いていました。ジャムやハチミツを好きなだけ食べてもいいんだって……ときどき子供みたいなことを言うんです」

「いい手順だ。お父さんに譲つたのかね」

「はい」

「続けたまえ」

エンゲルは手元の作業にもどった。

香りののぼるカップを盆にのせてそばに行くと、エドワルド教師は「ありがとう」と言って受け取った。「ジャムはどうなさいます？」

エドワルド教師はジャムを所望した。エンゲルは多くも少なくもなく、ちょうどいいひとさじ分を掬つて差し出した。教師はついに、「それで、今日は何の用かね」と口にした。「個人的な用件か

ね？」

「お話をさせていただきたくて」

と、エンゲルははにかんだような笑顔を作つて切り出した。

「その……先生は、若い男女の とりわけ僕らのよつた年齢の子供たちの異性交遊について、どう思われますか？」

エドワルド教師はめずらしく、片眉を上げた。少しばかり怪訝な顔をしたように見えたが、すぐにいつもの厳格な表情にもどり、よどみなく答えた。「健全な男女の交流が、必ずしも青少年に悪影響があるものだとは思わんよ。もっとも、われわれの時代にはそう考えられているようなふしあつたがね。だが五十年前の考え方が今の世に通用するとは思わん。大いにやりたまえ」

エンゲルは胸に手をあてて、いくらかおおげさな様子で「よかつた！」といった。

「問題は、恋の魔力が強すぎることなんです」

「と/or/？」

「僕らのような未熟な青少年には、とても抗えるよつたもんじゃない。女の子のほほえみや、白い手や、髪の香りは、たちまち僕らを虜にしてしまうんですもの。頭の中は彼女のことでいっぱい、もし振られたらどうしよう？ 勉強に身が入らないなんてことに、覚えは？」

「誰の話をしているのかね。どうも君ではなさそうだが、エンゲル・

ミコラー」

「いま、まさに花をつけようとしている恋の若芽があるとして

「まわりくどい表現はよしたまえ。誰のことだね」

「オリバー・デーニッシュです」

エドワルド教師は嘆息した。「そついたことにばかりずいぶんと勉強熱心なようだね、彼は

「まさに花をつけるか枯れてしまつかの瀬戸際に置かれた哀れなすずらんです。もし今週の待ち合わせに行けなかつたら、相手の子は一度とオリバーに会おうとは思わないでしよう。彼は告白をするチ

ヤンスさえ永遠に失つてしまふんです、先生！　もし　どうか、彼の外出取り消しを撤回してくださいたら、レポート十枚でも彼はよろこんでやると思うんだけど、どう思われますか？」

「本気かね？」

「僕だつて友人の恋を実らせたいと思う」とくらいたります」エンゲルはほほえむ。「恋の誘惑を知る青少年のひとりとしてしばらく経つて、教師は長いため息をついた。

「今日はこのお茶に免じよう」

「ありがとうございます、先生」

「ただしオリバー・デーニッシュ、彼はいかん。未熟な青少年であること的理由には、いたさか羽目をはずしすぎるところがある。これは寮長である君も認めざるをえないと思つが、そうだな？」

エンゲルははいと言つてうなずいた。

「レポートの出来によつては、一度と私の慈悲を期待できないと思つたまえ。そう伝えなさい。さがつてよろしい」

エンゲルは折り目正しく一礼して、彼の前を辞した。

部屋を横切り、扉に手をかけたところで、後ろからエドワルド教師の声が迫りかけてきた。「美味しいお茶をありがとうございます、よほどきちんととした教えを君に授けたのだな」

「ありがとうございます」

「家族を大切にしたまえ。お茶の習慣を愛するすべての人は、必ず深く理解しあえる」

「父も同じことを僕に言います。家族は僕の誇りです」

「下がつてよろしい」

もう一度振り向いて礼をしたとき、エドワルド教師はすでに手元のレポートに目を戻していた。エンゲルは邪魔にならないよう、そつと扉を閉めた。そしてから、そのままの姿勢で動きをとめた。獅子のレリーフの、空洞の眼が彼を見ていた。

家族は僕の誇りです。

彼がそうしていたのは一瞬のことだった。

突き放すようにドアから手を離すと、きびすを返し、規則正しい足音とともに廊下を歩き出した。このときオリバーのことはもう忘れていた。エドワルド教師に言つたことも、言われたことも半分以上はどうでもよかつた。それに彼は恋の誘惑なんて知らなかつた。西口の射す廊下を歩きながら、彼はじつと自分の手のひらを見つめた。

ロシア式紅茶など淹れたのは今日が初めてだつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9232z/>

---

アデライード

2011年12月28日22時53分発行